

新約聖書の西方型ギリシャ語本文

杉山 世民

新約聖書のギリシャ語本文は紀元1世紀頃、地中海沿岸に見られたコイネ一期のギリシャ語の代表的なものと言える。その新約聖書本文の伝達の過程はグーテンベルグの活字印刷の発明までは筆写家の手作業でなされたため残されている写本群も当然一様ではない。この写本群を初めて質的に類別したのはベンゲル (Johan Albrecht Bengel: 1678~1752)であったが、このベンゲルの写本の系統的分類を更に改善し、写本群をアレキサンドリヤ型、西方型、ビザンティン型と分けたのはドイツの新約学者グリースバッハ (Johan Jakob Griesbach: 1745~1812)であった。後に、近代の新約聖書本文批評の基礎を築いたと言われるウェストコットとホート (Brooke Foss Westcott: 1825~1901, Fenton John Anthony Hort: 1828~1892 以下WHと略す)がシリヤ型、西方型、アレキサンドリヤ型、中性型と四つの分類に到達した。この小論はWHが「西方型(Western text)」と呼ぶ写本群についての一考察である。

1. 新約聖書本文の所在

新約聖書本文の自筆の原書 (ιδιόχειρα) は現存しない。「使徒以降の著者たちの文書の中にも原書 (ἀρχέτυπα) がどこにあるとか、この目で原書を見たという証言は見当たらない。多分、一世紀の終わりには原書は消滅していたであろう。」と聖書学者フィリップ・シャフは言う。⁽¹⁾ しかしながら、その原書は手で筆記され数多くの新約聖書本文の写本等が存在する。C. R. グレゴリーの写本分類によれば、パピルス、大文字及び小文字写本、聖書日課、護符などを含めると5, 000以上の証言があるという。⁽²⁾ 現在、我々が手にしている新約聖書本文は、そのような数多くの本文に関する証言を「本文批評学」という科学的手法を応用して復元されたものである。この本文批評学は、本来、ギリシャ人の間に起こったものでホメロスの詩の本文の

より正確な版をこしらえようとする努力から生じたい。⁽³⁾ギリシャの吟誦家たちはイリアスやオデュッセイを朗誦するに当たってより効果的にドラマチックに改作したいという誘惑と戦わなければならなかった。原文回復を目的とするこの本文批評の作業が新約聖書本文にも初めて応用されたのは、権威主義的なローマの主教・教皇ヴィクトール(187~198)によって異端として破門された皮革商人テオドトスによってらしい⁽⁴⁾が、本格的な本文批評研究はカイザリヤのオリゲネスに帰されるべきであろう。新約聖書本文に関する写本の数は圧倒的に多い。信仰的理由から新約聖書本文の写しを持つことを望む者が多かったのであろうが、手で筆写する数が多ければ多いほど(つまり、写本の数が多いほど)写本間の異読の数も多くなるのは自然である。逆に、又、写本の数が多いほど原文回復の正確度も高くなると言える。

新約聖書本文伝達の歴史には様々な葛藤があったが、結論として今日我々が手にすることの出来るUBS(United Bible Societies: 連合聖書協会版)の第3版とネストレーアラント版の第26版とは段落等に相違は見られても殆ど同じ本文という事が出来る。多くの人々の学的労苦と葛藤を経て我々はこの中に非常に高い確度で「復元された原文」を持っていると言うことが出来ると思われる。確かに写本の数が多いだけ異読の数も多いと言わねばならない。1707年イギリスの新約学者ジョン・ミル(John Mill: 1645~1707)が新約聖書本文の写本全体の中に約30,000にのぼる異読があることを発表した。当時、チュービンゲン大学の学生であったベンゲル(上記)は、これを聞いて彼の敬虔な聖書信仰は揺らぎ、彼は生涯を聖書本文伝達の研究に捧げたと言われている。しかし、実際は細かい語順やミススペルなどが多く意味の上において本質的に影響を及ぼすものはそう多くはない。ケニオンは「本文の本質的相違は全体の千分の一以下」という。⁽⁵⁾1874年スクリヴナー(Frederick H. A. Scrivener: 1813~1891)は異読の数は10万から15万にのぼると発表した。しかし、シャフは10万から15万の異読のうち意味に影響を与えるのはおよそ400ぐらいしかないという。⁽⁶⁾

2. 印刷された新約聖書ギリシャ語本文の歴史

グーテンベルグの活字印刷の発明は西洋文化と文明に非常に多くの影響を与えた。グーテンベルグの最初の印刷物は一枚ものの「免罪符」で対トルコ戦争の資金集めという名目で発行されたいが⁽⁷⁾最初に印刷された主な

本は1456年ドイツのマインツで出版されたヒエロニムスのラテン語ウルガタ聖書であった。短い抜粋は別としてギリシャ語の聖書が初めて印刷されたのは1514年であった。新約聖書本文として印刷するためには必然的に異読を何らかの形で解決せねばならない。そこで異読に直面したとき編集者は当然どの読みを本文として選ぶべきか選択を迫られるのである。最初に印刷された新約聖書ギリシャ語本文はヒメネス (Francisco Ximenes de Cisneros: 1437~1517) の編集によるものであったが、これに先んじて最初に出版されたのはエラスムス (Desiderius Erasmus: 1469~1536) の編集による新約聖書であった。(8)

印刷された新約聖書ギリシャ語本文の中で極めて重要なのがフランス王室のおかかえ印刷屋ロバート・エスティエンヌ (Robert Estienne, ラテン名は Robertus Stephanus: 1503~1559) が1550年に出版した「レギア版」と呼ばれる版である。この版は写本間に見られる異読の記録 (欄外資料 critical apparatus) を備えた歴史上最初の版である。(9) 異読の選択に関する資料を読者に提供したという意味において画期的な企てであったと言える。実際、フランスの学者、宗教改革者であったベザ (Théodore de Bèze: 1519~1605) は重要な西方型写本の代表と言える写本D (ベザ写本) の本文を持っていたのであるが、これは当時一般に受け入れられていた本文とは余りに違っていたために自分の編集するギリシャ語新約聖書のためにほとんど用いなかった。因みに1611年イギリスで欽定訳 (King James' Version) が出たとき、このベザの版が大いに用いられた。(10)

オランダのライデンにある印刷所から1633年に出版されたエルセフィル兄弟 (Braventura 1583~1652 & Abraham 1592?~1652 Elzevir) の新約聖書本文はベザとステファヌス版と大差は無かったが、この版の「前書き」の言葉がこの本文を決定的なものとし、1881年改訂版が出るまで迷信的な権威さえ持つようになっていった。実に、この本文を批判し改定する者は、「冒流者」とさへみなされた。その前書きにはラテン語でこう記されている。" Textum ergo habes, nunc ab omnibus receptum, in quo nihil immutatum aut corruptum damus" 「(読者は) 今や全ての人に受け入れられた本文を持っているのである。我々は、これに何ら変更や不純さを加えていない。」(11) 下線を引いた言葉から Textus Receptus (標準本文、公認本文。以下 TR と略す) という名称が生じた。実際には、この本文の基礎は年代的にも比較的遅い小文字写本にあって劣質であったが、(12) この本文は欽定訳をはじめ

ヨーロッパのプロテスタント訳の全ての底本となっていった。

3. WHの批評原理

上に述べたように、TRというこの不完全な本文は約二世紀の間、迷信的な權威を享受するのであるが、この間は本文が書き改められることはなく、本文の証言を求めて資料が集められる異読収集の時代に入る。ドイツのベンゲルが写本群の研究を進め、証言(写本)の「数」よりも「質」が重要視されるべきことを主張し、ここから新約聖書本文批評の歴史の流れはイギリスからドイツへと変わり近代的批評の時代へと入ることになる。この間年代的に古い大文字写本の発見などがあり、⁽¹³⁾WHの二人は、特にティッシュENDORF (Lobegott Friedrich Constantin von Tischendorf: 1815~1874) が残してくれた資料を厳密に学問的に調べ28年間の成果を込めて1881年に二巻からなる *The New Testament in the Original Greek* を出版した。ケンブリッジ大学の神学教授であったホートは第二巻の Introduction (概論) で本文決定に至る詳しい批評原理を記した。WHは1870年カンタベリー宗教議会により欽定訳(KJV)の改訂委員に指名されていたが、改訂本文(RV)の作成に大きな影響を与え、近代本文批評学の揺るぎない基盤を築いたと言っても過言ではない。

WHの批評原理は、次の二つの文章にその精神が披瀝されていると言える。ひとつは“Knowledge of documents should precede final judgement upon readings.”⁽¹⁴⁾「文書についての知識が読み方の最終的判断に先行すべきである。」、もうひとつは、“All trustworthy restoration of corrupted texts is founded on the study of their history, that is, of the relations of descent or affinity which connect the several documents.”⁽¹⁴⁾「悪化した本文の信頼すべき回復は本文の歴史の研究に基づく。即ち、多くの文書を結び付けている血統関係ないし近親関係の研究に基づく。」である。本文決定に当たっては信仰的偏見や党派心で決定するのではなく真摯な学的根拠を第一とする姿勢が伺われる。

WHはこのような観点から「異読融合」が原本より遠い後代の読みであると判断する。例えば、マルコ福音書9章38節にκαὶ ἐκώλομεν αὐτόν, ὅτι οὐκ ἠκολούθει ἡμῖν。「その人は私達について来なかったので止めさせました。」(口語訳)とあるが、大多数の写本では ὁς οὐκ ἀκολούθει ἡμῖν καὶ

ἐκωλύσαμεν αὐτὸν ὅτι οὐκ ἀκολουθεῖ ἡμῖν.と読む。これに対しては二つの異読群が見られる。(a) καὶ ἐκωλύομεν αὐτὸν ὅτι οὐκ ἀκολουθεῖ ἡμῖν。(b) ὅς οὐκ ἀκολουθεῖ μεθ' ἡμῶν καὶ ἐκωλύομεν αὐτόν。WHによれば、大多数の読みは明らかに(a)と(b)の異読融合であって、(a)か(b)の短い読みのいずれかが長い読みより早い時期に書かれたことを示しているという。このように「短い読みは優先さるべきである。」という原理が貫かれている。⁽¹⁵⁾

4. 西方型テキストの役割と評価

WHは写本群を次のような見解で四つに分類した。

- (1) シリヤ型→キリスト教が四世紀に公認されると新約聖書の異読が公式に、又、非公式に除去され、不明瞭な箇所は一般に上に述べた「異読融合」というやり方で修正し、困難な読みを読み易いものにしていくという企てがなされていった。こうして混合本文という特徴を持った「シリヤ型」が登場した。読みはスムーズであるが力がなく時々粗雑である。この型の代表的写本はA(アレキサンドリア写本)と数多くある十世紀以降の小文字写本全体である。
- (2) 西方型 →かなり早い時期から異読が入ってきており当時流布していた伝統的本文と並行させたり、あるいは同義語を使って自由な言い換え(paraphrase)をすることを好む。一般的に長い読みが多く⁽¹⁶⁾、大胆で問題は多いが、この本文の起源はかなり古い。初期の教父の殆どがこの本文を用いている。代表的な写本はD(ベザ写本)である。
- (3) アレキサンドリア型→アレキサンドリアはギリシャ古典文学批評の本場であったことから新約聖書本文は文学的な目で読まれ口語的平易な表現は洗練された言葉に変えられ文法的不備も正確なものにされ、本文が全体的に美しく洗練されている。西方型に比べ変更は微妙である。代表的写本はC(エフライム写本)やL(レギウス写本)それにアレキサンドリアの教父、クレメンス、オリゲネスなどの引用本文である。

(4) 中性型 → 以上のような三つの改悪を免れた少数の写本群があった。
この写本群には最もオリジナルに近い形が保有されている。
この本文はN (シナイ写本) とB (ヴァティカン写本) が
同じ読みをするとき得られる。特にBの本文はすぐれて
おり決定的証言力を持つ。代表的写本はN (シナイ写本)、
B (ヴァチカン写本) であり、これらは同じ原型 (exemplar) を用いている。

このようにWHの写本に関する見解は、かなりN B偏重であることがわかる。レーク (Kirsopp Lake: 1872~1946) によればN B本文はアレキサンドリア型本文の極初期の形に過ぎない、という。⁽¹⁷⁾ WHの見解によると西方型は改悪 (corruption) の多い基本的には斥けられるべき本文であるが、ただ、次の九ヶ所は、西方型の方が短い読みを持っており、他の証言の方を加筆とみなす。これらは「西方型無加筆 (Western Non-Interpolations)」⁽¹⁸⁾ というまわりくどい呼び方で呼ばれ、この九ヶ所については西方型が最もオリジナルに近い本文を保有しているとWHは考える。例えば、ルカ福音書24章51節の最後の部分は大多数の読みが *καὶ ἀνεφέρετο εἰς τὸν οὐρανόν* と読むが、この箇所においては西方型の代表的写本Dと中性型の代表的写本のひとつであるNとは証言が一致し、この一文を欠いている。

WHは特定の部分を除いて西方型本文は劣質と考えるが、現存する最古の大文字写本でもせいぜい四世紀よりさかのぼることはない。また、西方型本文といってもあらゆる写本の中に散在するひとつの特徴を持った本文の型であるに過ぎない。しかし、1881年以降に見えられWHが参考にできなかった写本にシナイ-シリヤ語写本がある。これは1895年に英国の二人の女性ルイス夫人とギブスン夫人 (双子の姉妹で共に古代オリエント学者) によってシナイ山のカタリーナ修道院で見えられたものであるが、普通のシリヤ語 (ベシッタ) ではなく、古代シリヤ語訳であることがわかった。メッツガーによれば、この古代訳は二世紀末か三世紀初頭の本文の訳と思われ、本文は西方型により近づくといい。⁽¹⁹⁾

【結 論】

西方型テキストは、その起源において極めて初期にさかのぼる。たとえ部

分的であれオリジナルを含んでいることは疑いない。⁽²⁰⁾もし、WHが言うように西方型が改悪を多く含んでいるのならば、なぜ、地理的にも広範囲に亘る極初期の教父たちの間で西方型が広く用いられたのであろうか。ここに西方型本文の「謎」があり、十分に掘り尽くされていない価値がある。C. R. グレゴリーは「西方型テキスト」を「オリジナルの改作 (re-wrought)」⁽²¹⁾と呼ぶほど高く評価している。いずれにしても、西方型テキストが新約聖書本文の原文を「復元」するために果たす役割は、過小評価されてはならない。西方型テキストに関する研究の余地はまだ多く残されていると言わなければならない。

【注 釈】

- (1) The New Testament in the Original Greek: B. F. Westcott & F. J. A. Hort, with an introduction by Philip Schaff. New York, 1887. p. xi.
- (2) Metzger, Bruce M., The Text of the New Testament, Oxford, 1968. pp.32-34.
- (3) *ibid.*, p.149.
- (4) Metzger, *op. cit.*, p.150.
- (5) F. ケニヨン、『聖書の生い立ち』山本七平書店 p.41.
- (6) Schaff, *op. cit.*, p.liv.
- (7) 小嶋 潤、『新約聖書正典の編成と伝承』聖文舎 p.61.
- (8) Metzger, *op. cit.*, p. 98.
- (9) Metzger, *op. cit.*, p.104.
- (10) Metzger, *op. cit.*, p.105.
- (11) Metzger, *op. cit.*, p.106.
- (12) *ibid.*
- (13) Schaff, *op. cit.*, p.xviii.
- (14) B. F. Westcott & F. J. A. Hort, The New Testament in the Original Greek, New York, 1943. p.545.
- (15) Lake, Kirsopp, The Text of the New Testament, London, 1908. p.64.
- (16) *ibid.*, p.74.
- (17) Lake, *op. cit.*, p.70.
- (18) Metzger, *op. cit.*, p.134. 『西方型無加筆』として次の9ヶ所を挙げている。マタイ 27:49, ルカ 22:19-20, 同 24:3,6,12,36,40,51,52.

- (19) Metzger, op. cit., p.69.
- (20) 「今日の新約聖書本文批評家は西方型テキストの中に他の型には無いオリジナルの読みがあることを疑いなく認めている。」と言う。Elmer E. Flack & B. M. Metzger, The Text, Canon and Principal Versions of the Bible, Michigan, 1956. p.13.
- (21) Gregory, C. R., Canon and Text of the New Testament, Edinburgh, 1907, p.489.

《Assessment of the Western Text in New Testament Studies》

The purpose of this essay is to observe and assert that the Western Text of the New Testament is of great importance and value in constructing the original text, which is the autograph that is no longer extant in its entirety.

We do, however, have legions of witnesses in which the original reading is embedded. But the original wording is not preserved in one particular text-type alone, as Westcott and Hort have the tendency to insist. The Western Text has been rather abhorred as corrupted, paraphrased, and freely interpolated. But the fact that most early Christian writers, as early as the second century, bear witness of the Western Text in a wide geographical area, indicates this text-type prevailed and was frequently used in the early period.

In conclusion, it can be definitely said that the basic Western Text is relatively pure and close to what was originally written, but suffered from various hands through frequent additions and alterations. C. R. Gregory calls it the "Re-Wrought text" instead of the "Western Text" and convincingly asserts that the Western Text is the re-work of the original. Thus it plays an important role in preserving the original text, as well as assisting in its reconstruction.